

(c) 現地協定さえ実施せず

TK部隊よりLOが連絡に来たとき、IBN長は自己の企図も示さず、現地協定には一顧をも払わなかった。

(d) TKの進出遅延

TKは準備時間が少く敵情地形の偵察不十分のまま前進したが与那原付近から首里を経て石嶺付近の待機位置への夜間機動が遅れ、又敵砲兵の集中火を受けてその第1線進出が遅れた。従つてIBNの戦斗に協同できず他方面の戦斗に加入した。

(e) TK性能の弱体

性能の不良を夜間と煙幕により補おうとしたが、敵は標定射撃および煙に対する地域射撃を実施したので大なる損害を受けた。

。 参考所見

(1) 27TKRが攻勢において威力を発揮し得なかつた原因は他にも種々あるが根本的には戦車の性能の劣弱に帰せられる。この種兵器の性能は精神力や運用のみを以てしては補い得ないことを考えれば、将来に互つて注意を要する点とみられる。なお当初から性能に応じて防禦に使用することも結果からみれば有力な一案であつたと思われる。

(2) 32Aの軍直轄砲兵はこれまでの太平洋地域における各戦斗に比べれば確かに極めて有力なものであつた。また各部隊が周到な射撃準備と築城によつてよくその威力を発揮したことも推賞に値する。

しかし種々当時の実情を調査してみると、通信連絡、情報、射撃指揮、準備弾薬数等、必ずしも満足すべき状態ではなく、いずれも極めて制約された状況下における戦斗であつた。それにも拘わらず米軍が32Aの砲兵の活躍を強調していることは、一面からみれば物的戦力を過大視する米軍の特性にもよるものであろうが、また戦斗における砲兵火力の価値が極めて大きいことを示すものでもあると考えられる。

(3) 上記にも関連するが、当時の歩砲協同は現在の自衛隊における状況とは著るしく異なり、連絡、情報交換の組織も極めて制限され、これに加えて通信は専ら有線に頼り、しかもこれが屢々断絶する状況であつたという。従つてこれらの困難を克服して相当に協同の実を収めたことは、事前の計画調整と、歩砲双方の努力に依る所が大であつたものと推定される。

5 対戦車戦斗

a 4-19 嘉義地区における 231Bns (山本大隊) の対戦車戦斗、とくにその成功の原因

(1) 本戦斗の意義

231Bns の実施した対戦車戦斗は、その歩戦分離の戦法が成功し、30両の米軍 TK のうち 22両が撃破され、捕獲したもの 8両であつた。これは沖縄作戦中、米軍が一度に失つた TK としては最高であり、彼我それぞれ士氣上に与えた影響は極めて大であつた。

これにより米軍は嘉義陣地の正面攻撃を断念せざるをえなくなつたが一方、この失敗により歩戦チームの必要を痛感し、以後における貴重な体験となり、再びその轍を踏まないようになつた。

(2) 米軍失敗の原因

(a) 12日までの戦斗経験により日本軍の陣地は TK を使用せねば奪取出来ぬことを悟り、TK を使用することとしたが、TK 部隊と i 部隊が同行せず TK は異方向より先行して突入する方式を採つた。従つて歩戦が分離される危険性が計画自体の中であつた。

(b) TK は地形及び日本軍の配備を充分偵知することなく、装甲に頼つて無謀に突進したので対 TK 砲の好餌となつた。

(c) TK 部隊と歩兵部隊との相互連絡不十分
連隊長の指揮もまた鈍重のため、TK 部隊に対する

反転命令が遅れ、増援歩兵の進出も遅延した。

(d) 午後より天候が悪化し、ますます戦闘動作を鈍重にした。

(3) 日本軍成功の原因

(a) 米軍の企図および戦法を事前に洞察し、十分な準備を実施した。これがため、歩戦分離の戦法、すなわちまず対歩兵阻止を主眼とし、陣前に対歩兵火網、対歩兵戦闘群を配置し、TKを陣内に引き入れて叩く準備をしていたが、これが「うまく図に当った」と言われる。

(b) 陣内には、よく秘匿された陣地から47ミリ速射砲、連隊砲、迫撃砲火力を集中するとともに、これと連携して肉攻を実施した。

(c) 13～18日の間、再編成が実施され、当日の激戦陣地の戦力は充実していた。

b 各種対TK火器および資材の効果

(1) 手段と効果

米軍戦史より見ると、射撃(砲、迫、対TK火器)によるものが最も効果があり、これに比すれば肉攻は成果が少なかったことを示している。

○ 陸軍各DのMTK4=Bnと10A直轄の火焰放射TK1=Bnの総計約388両

○ 5月末の損害、221両(上記総数の57%)このうち射撃によるもの111両(50%)地雷によるもの64両(34%)その他(肉攻、悪地形によるもの)

注: 6月末、10AはMTK147両、LTK4両の損害となっているのは現地整備の結果によるものであろう。

(2) 肉迫攻撃

米軍は当初歩戦チームの戦闘の要領が拙く、歩戦が分離してTKが肉迫攻撃により壁破されることも多かつた。

しかし、第2主陣地帯の攻進以降は歩戦チームの行動が熟練し、TKを歩兵火器として使用して歩兵がよくこれを掩護した。これがため肉攻員が近接できず、成果が減少した。

肉攻資材としては急造爆雷、梱包爆薬、制式資材、応用資材によるものであつたが、結局、爆薬を抱いて行う特攻が最も効果があり、しかも幾多の将兵は敢然として

これを実行した。

(3) 火器の効果について

37ミリ対TK砲の効果は少なかったが、巧みに遮蔽された47ミリ対TK砲の1発は、よくMTKを破壊または炎上させた。しかし第3発目頃からは敵火に制せられて、手が出せないことが多かった。

砲兵とくに90野砲、ならびにR1Aは相当の成果を挙げた。

(4) 地雷

相当に効果があった。しかし更に組織的に地雷地帯を構成することが出来たならさらに効果を増大したであろう。

(5) 障害物

人工障害物とくに対TK壕は熾烈な砲爆撃の前には効果が少なかった。自然の地形障害及び雨による影響は相当大であつて、火力肉攻を併用し大なる成果を挙げた。

c. 参考所見

(1) 対戦車戦闘は陸上戦闘の基盤として周到に準備、訓練されていたため、火力、障害、肉攻の三者がよく調整され巧みに運用された。特に初期の戦闘において敵戦車に多大の損害を与えたことは今後の敵の行動を慎重ならしめ、大いに防禦戦闘に寄与したものと判断される。なお肉攻の効果は数字的には大きくなかったが敵の恣な行動を制限した意味では高く評価してよいものと思われる。

(2) S2Aの上記の如き努力と、沖縄における比較的有利な地形にも拘らず戦車は米軍にとっては最も有力な攻撃兵器として威力を発揮した。根本的には彼我の装備、戦力の差によるものでやむをよむを得なかつた訳であるが将来については改めて考慮すべき問題であろう。

6 指揮官の性格等が戦斗に及ぼした影響

a 伊東大隊 (I B n / 30 i R)

(1) B n 長伊東大尉の性格

陸士 54 期出身の典型的青年将校で、極めて積極的で実行力旺盛、思慮周密、明敏で機眼に富み、統率力に優れていた。又かねてから戦史、戦訓に親しんでいた。

(2) B n 長の統率が部隊に与えた影響

固有の部下は、満洲時代より上下の親しみが深く、よく団結し、濃刺とした気風があった。

戦斗間の臨時配属将兵もまた、B n 長に信服し、その意図がよく部下に徹底していた。

(3) 戦斗に現われた特色

戦うところ常に赫々たる功績を挙げた。すなわち、防禦においても受動に陥ることなく積極的な戦斗を実施し、攻撃すれば成功して敵の心胆を寒からしめ、感状、賞詞の榮譽にふさわしい働きをした。

とくに、戦況悲惨の極にあつても部隊士気旺盛であつたこと、B n 長以下各指揮官が、常に新戦法を案出して敵の意表に出たことが賞讃される。

b 賀谷大隊 (121 Bns)

(1) B n 長 賀谷中佐の性格

陸士 33 期出身で戦斗、人生経験ともに豊富、頭脳明敏で機略に富み明朗な楽天的性格であった。又統率力に優れていて、本郷師団長の最も信任厚い大隊長であった。

(2) 部隊に与えた影響

B n 長の親分的性格により、B n の団結は極めて鞏固であつて、部下将兵は、[敵が来たら B n 長を中心に陣を作つて守る]と話し合つていたほどであつた。

部隊は永く支那戦線で戦い、実戦の駆け引きについてよく熟練していた。

(3) 戦斗に現われた特色

(a) とくに選ばれて前進部隊となり、嘉手納からの退却行動を巧妙に実施して成果をあげた。

(b) 各所の防禦戦斗において、虚々実々、極めて頑強な抵抗を行い、とくに前田においては完全に孤立化するもなお旬日果敢な洞窟戦斗を実施した。

思の長い戦斗を実施したことは將に沖繩随一の部隊であつた。

c 山本大隊 (231 Bns)

(1) B n 長山本少佐の性格

少侯 11 期出身で、年令的には、前記、賀谷、伊東両 B n 長の丁度中間の 40 才前後であつた。

杉本氏 (D T 長) の回想によると、天型的武人で戦斗経験豊富、支那事変においても感状を授与された。上司、同僚、部下の信望厚く、節氣のない真に誠心の人であつた。

(2) 部隊に与えた影響

固有の部下も新編入の兵員もよく B n 長に信服し、B n 長の意図どおり行動することができた。

(3) 戦斗に現われた特色

(a) 4-12 夜の宜野湾街道に沿う敵陣地内の突進、嘉数陣地の対 T K 防禦、安波茶の陣地の固守においてそれぞれよく目的を達成した。

(b) 宜野湾街道に沿う突進でよく敵の配備の間隙を衝いたこと、嘉数ボケツトに敵 T K を導入してその大半を駆破したこと、安波茶で苦戦中にかかわらず前田の友軍救援に努力したことなど、B n 長の人柄がよく現われている。

d 上記各部隊が、とくに本作戦において勇名を馳せた理由

(1) 戦いは勝たねばならぬ。上記の各大隊は各々局地的には戦いに勝っている。戦勝が勇名を馳せた最大の理由であり、その原因として次の共通的なものを感じられる。

(a) 優秀な口長のもと、上下一体となり、よく団結した。とくに激戦の最中、新たに編入または補充された部隊との心の和が保たれていた。

(b) 戦法の適切

今日の戦訓は直ちに明日に活用し、常に敵の意表に出るとともに、実行に当つては、断乎として全力を尽した。

とくに万才突撃とか、一地固守玉砕といったような硬直性を戒め、虚々実々、適時要点に戦力を発揮した。

(c) 敵の戦力を至当に判断し、過早に戦力を損耗しなかつたこと。とくに、各部隊長とも兵站には特別の配慮関心を持っていた。

沖縄作戦の観察

(主務者第2次案)

第4 国民の協力・戦斗参加及び 避難行動

目 次

	頁
1 中央の指導方針-----	4-1
a 老幼婦女子の島外疎開特に強制力-----	4-1
b 戦場地帯の行政責任-----	4-3
c 最終段階における非戦闘員の取扱いに対する指導-----	4-5
2 現地における軍官民の関係-----	4-7
a 32Aと沖縄県庁との協力関係-----	4-7
b 32A将兵の軍紀・風紀が島民に及ぼした影響 及び島民の言動が32A側に及ぼした感作-----	4-8
c 32Aの要望事項の徹底度-----	4-10
d 戦場地帯における行政活動の実態-----	4-11
3 32Aによる国民の戦力化及び非戦闘員の処理要領-----	4-12
a 防衛召集及び男女中等学校生徒の戦力化-----	4-12
b 作戦開始前における非戦闘員の疎開に対する指導-----	4-15
c 作戦間における非戦闘品の避難についての指導-----	4-16
4 義勇挺進隊の編成とその実績特にこの種部隊に 期待しうる限度-----	4-18
5 非戦闘品の避難行動及び損耗の実態-----	4-20
a 作戦開始前における非戦闘員の島内疎開が進捗 しなかつた原因-----	4-20
b 戦斗末期、島尻地区において非戦闘員に大なる 損耗を生じた原因-----	4-22
6 参考所見-----	4-23

第4 国民の協力、戦斗参加及び避難行動

1 中央の指導方針について

a 老幼婦女子の島外疎開特に強権力

- (1) 中央において沖縄の老幼婦女子の島外疎開が真剣に配慮されてきたのはサイパンの戦斗以後で沖縄県庁においても昭和19年7月以降具体化して来た。疎開は法的には強制力がなくいわゆる「勸奨」の形式で行なわれた。政府の疎開のための施策は次のようであるが強権の発動でなくすべて前述の勸奨で行なわれた。

都市疎開実施要綱(昭18.12.21閣議決定)

一般疎開促進要綱(昭19.3.31 ")

学童疎開実施要綱(昭19.6.30 ")

学童疎開促進要綱(昭19.7.17 発表)

帝都学童集団実施要領(" 発表)

老幼者、妊婦等の疎開実施要綱(昭19.11.7閣議決定)

これら政府の全般施策は特定の大都市(東京、神奈川、大阪、愛知、福岡等の13都市)を重点とされたが、昭和20年1月25日「沖縄県防衛強化実施要綱」が閣議で決定され、県民の総力防衛、食糧の増産確保、県外疎開、住民の立退等を指示された。

疎開実施においては、移転奨励金の交付、住宅、輸送、

転就職、転入学、食糧配給等のあつせんが必要であり、本土より隔絶した沖縄県は、他県、台湾等との調整も容易でなく、輸送難、島民の縁古関係等よりして、事務的にも人情的にも実行上に多大の困難があつた。船舶の逼迫、海上不安等の直接の障害はあつたが、その実績は計画の約70%であるから比較的良好と思われる。

- (2) 中央統帥部においては事態緊迫の場合の住民の処理について研究を重ねていたが事極めて複雑多岐のため敵の上陸前までに実行性のある割切つた案に到達することが出来ず、軍として明確な指示指導を行なうことがなかつた。

軍の中央及び32Aとしても島外疎開特に他府県等への疎開に対しては強制力は法的に根拠がなく、強い要請を行うとともに疎開用の船舶あつせん等に援助を与える範囲以上の余力がなかつたようである。

b 戦場地帯の行政責任

戦場地帯の行政責任は最後まで沖縄県知事であつて、もし戒厳令が施行されていたならば当然軍の責任となつた。

沖縄戦当時において軍、官、民を一元的に統制指揮（軍事、行政、司法）しうる法的根拠としては戒厳令の施行が最強力である。軍中央においては沖縄の戒厳令について昭和19年6月頃より考えられ、研究もされたが現地軍に対し指導されることはなかつた。現地32Aは戒厳令について研究し、敵上陸後において発動することを考慮し住民の立退き等の指導に關し部隊に指示をしているが、中央に対して要請されなかつたようである。

敵上陸後も戒厳令の布告はなされなかつた。

戒厳令の施行を中央にて明確に指示し得なかつた原因は、戒厳令施行に伴う利害のバランスであつて中央も現地軍もついに暗切り得なかつたようである。戒厳令施行に伴う利害の主要なものは次のように考えられる。

- 利 (1) 行政、司法に対する上級官庁の指揮権を排除し、軍自ら之を指揮するので人的、物的に軍の作戦に強力を集中が可能である。
(2) 地方長官が中央その他に顧念することなく軍の要請に応じ得る。
(3) 作戦の推移に応じ緊急臨機に住民の強制処理等が可能である。

- 害 (1) 複雑多岐な行政司法面において軍に多大の負担がかかり、またこれに伴う責任が当然生ずる。
(2) 運用実施面において軍の指揮適正をえない時は逆効果を招き反軍的となり騷擾を生ずる。（周到な研

究と準備がいる)

- (3) 強権の発動は国民の強力意欲を消極的ならしめる心理的影響がある。
- (4) 全国戒厳令の場合には政府及び議会との関係を適正に律することが必要であるが、戒厳令に規定がなく新たにこれを律する必要がある。

以上のような利害を考察すると容易に戒厳令の施行に踏み切れなかつたことも首肯されるし、特に沖縄官民の協力が極めて良好で直接の作戦準備に特別の支障がなかつた当時の状況下では現地軍もその必要を痛感しなかつたようである。

最終段階における非戦闘員の取扱いに対する指導

望ましいことは島内外の疎開であつたが、敵上陸後の非戦闘員の取扱いについて今日結果的に見ればなお手段方法があつたように観察される。

中央としては憂慮しつつも現地軍官に対して明確に指示することがなかつた。本土防衛においてもこの問題は最後まで明確な判決が得られなかつた。

非戦闘員の取扱いについては次のようなことが考えられる。

(1) 非武装、中立地区の宣言

このことは実際に宣言等はなされなかつたが52Aの考え方の根底には見られる。すなわち国頭地区への疎開の促進及び戦後期の知念半島地区への退避指導は、住民を直接の戦火外に置かんとしたものである。明確に宣言し得なかつたのは当時の一億特攻の国民感情、敵愾心、恐怖心等からして割切り得る空気がなかつたであろう。

(2) 住民を包含する要塞戦

この要塞戦的の命令指示は中央から何等示されておらず、任務は敵の空海基地推進攻撃である。

52Aとしても出血強要の陣地配備であつて住民包含の要塞戦の計画はなされていない。

軍の戦勝により結果的に住民を保護する考えであり、軍の戦力発揮が第1義で住民保護は第2義的なものとなつている。このことは任務上からすれば当然のことといえる。

要塞戦を実施せんとするならば当初これが準備を周到

(陸地の構築、武器資材の蓄積、食糧の確保等)にしなければならぬ。

また要塞戦に適した地形、地域が必要となつて来る。独ソ戦におけるスターリングラード、レニングラードの防衛は軍民一体となり、強大な独軍の攻撃を阻止している。沖縄軍民の抗戦意識及び努力はソ連に勝るとも劣らないが、地域、地勢、後方連絡の持続、人口数、建造物等の差異が成功の因をなしたのではないかと観察される。

2 現地における軍・官・民の関係

a 32Aと沖縄県庁間の協力関係

相互の協力関係は人間関係(住民感情を含む)と情勢の逼迫度(認識)地理的条件(中央から孤立)によつて律せられたことが大であつて総合的にみて極めて良好であつたといえる。

すなわち、昭和19年3月軍司令部が創設された当時は太平洋のマリアナ強化が着手され、ニューギニア戦線は未だホーランジャ以東で死闘が行なわれており、かつ32A当面の作戦準備は航空作戦準備に主体が向けられてあつたこと等からして一般には逼迫感がなかつた。サイパンの失陥は中央及び現地に作戦的にも感情的にも逼迫感を与えた。特に、19.10.10の空襲は物心両方面に亘り直接島民に大打撃を与え、軍に対する協力が促進された。反面この空襲の痛手は軍に対する信頼感に多少悪感作を与えたようである。

泉知事時代においては軍の要請に対し、多少感情的の問題があつたようであるが状況の推移に伴い逐次真剣味を増し、ついで島田知事の着任を期として更に軍の作戦に最大の寄与をなすように行政施策が強化された。島田知事は敵上陸後においては軍司令部近くに位置し、軍と密接に連絡を築ちつつ行政面の指導に死力を尽した。

32Aの將兵の軍紀風紀が島民に及ぼした影響及び島民の言動が32A側に及ぼした感作

(1) 32A將兵の軍紀風紀が島民に及ぼした影響

32Aは軍紀風紀の維持に関しては軍司令官以下特別の配慮が払われ、訓示、注意等は勿論巡察の勵行、憲兵の活用等が行なわれた。

満州事変以来外地作戦の習慣を身につけ、その上支那、満州からいきなり沖繩に配置されて急速に作戦準備に着手した部隊がその頭を直ちに国内戦の觀念に切換えることは、沖繩の地理的環境（離島、風俗の差異等）からしても容易でなかつたことは十分想像される。このような環境からして本土と多少異つた軍紀風紀上の問題を生起する一因となつたことも判断される。

軍において軍紀風紀上特に留意指導された主要な事項は次のようである。

- (a) 軍民居住の分離
- (b) 警衛勤務の厳正
- (c) 敬礼の厳正
- (d) 爆薬の保管取扱
- (e) 車両事故防止
- (f) 農作物の保護
- (g) 婦女子に対する態度
- (h) 飲酒の戒心
- (i) 外出時の行動注意

これらの取締のために特に巡察を頻繁に行い賞罰を明らかにし、会報（殆んど隔日）により防犯に努力している。特に婦女子に対する犯罪に関しては軍司令官は極刑をもつて臨むと通達し、これが絶滅を期している。一面特種慰安所を設けてこれら犯罪の防止に注意している。

又、軍民混住を分離するための露舎（いわゆる三角兵舎）は命令をもつて強行された。しかしながら一部將兵の心なき言動は住民のひんしゆくを招き多少軍民離間の因となつたことは事実である。しかしながらこれらのことが作戦上特別に支障をきたしたと見られる事象は認められない。

一般的にみて沖繩配置部隊の軍紀風紀は良好で特に第1線部隊は陣地構築等の作戦準備に多忙をきわめていたのが実情のようである。軍に対する信頼が強ければ強い程些細な事実も批難の対象となつたことは事実である。

(2) 島民の言動が32A側に及ぼした感作

島民の言動中には多少反軍的なものもあつたようであるが、個人的利害、感情が主体をなすもので心なき軍人の言動に反射的に表現されたと考えられる点が多いと思われるのでその責任の一半は軍において負うべきであろう。思想的にせんだし或は集團的の反軍行動はなかつたようである。

軍紀風紀に直接の関係はないが各種の事情から生ずる軍民の感情疎隔は相互不信となり、戦場混乱の際スパイ容疑等の心証ともなり悪影響を及ぼしたようである。

(3) 特筆大書すべきことは牛島軍司令官の高潔な人格が軍はもとより島民よりこそつて尊敬され軍官民一体化の根源となつたことである。戦後今日に至るも島民の敬慕は変わらない。

c. 32Aの要望事項の徹底度

軍からの要望に対する協力は多少感情的の問題はあつたが、19年7月以降は県庁の体制も整い、誠心誠意実行され、物資の不足、人員僅少等幾多の障害を克服しながら最大の努力が傾注されている。

すなわち疎開業務、作業人員の差出、勤労奉仕、防衛召集業務、防衛の為の各種部隊の編成、物資材料の差出、後方支援、防諜、宣伝等深くましい努力がなされた。しかしながら物資の僅少、輸送機関及び燃料の不足等は実行を阻害した。

疎開問題は官の指導は相当に強かつたが、救護処置の不十分、要疎開者の不安、不決断等が阻害の一因になつて軍の要望が十分には達せられなかつた。

d. 戦場地帯における行政活動の実態

島尻地区の行政は島田県知事の人格と県職員の健在によつて百里戦線撤退頃までは組織的に行われたといえる。4月下旬に県知事は島尻地区の市町村長会議を招集し難民処理、食糧増産、土気昂揚を眼目として指導している。

敵上陸後においては後方指導挺進隊及び警察警備隊が編成されて、県知事の手足となつて行政活動が続けられており、当時の状況下においては適切な指導である。

県知事と中央との連絡は、杜絶したのですべて県知事の判断によつて処理された。かりに中央との通信連絡があつたとしても現地の状況に依する具体的な指導は不可能で精神的激励の範囲を出てないであろう。

戦斗地域内の行政は作戦上の要求が強力であつたが、県知事以下よく軍の作戦に即応し、戒厳は布告されたが、実際的には戒厳に準ずる行政がなされた。軍司令官の人格と県知事の人格は戦場混乱の中にあつてもよく精神的結合がなされていた。

国頭地区は敵上陸後県庁との連絡が杜絶したので主として派遣職員及び村長の判断によつて行政面は指導された状況である。村長等と国頭支隊長とは殆んど連絡がなかつたので軍からの指導は行われなかつたようである。

5 3 2 Aによる国民の戦力化及び非戦闘員の処理要領

a 防衛召集及び男女中学校生徒の戦力化

(i) 防衛召集

防衛召集は戦局の逼迫に伴い当然実施せらるべきものであるが、沖縄においては昭和19年7月頃には特設警備中隊の編成が行われて、ついで昭和19年10月下旬—11月上旬特設警備工兵隊に約1200~1300名が召集されて飛行場整備に充てられている。ついで11月上旬から遊撃隊に召集が実施され、一般部隊の防衛召集の主体は昭和20年2月以降となっており、作戦中の4月、5月にも実施されている。

防衛召集された人員は召集後解除された者もあり、臨時召集に切り換えられたものもあるようである。

防衛召集の総数は未だ明確でないが約2万に及んだようであるが、これを戦力化するためには組織の強化と武器資材が必要であるが極めて不十分であつて、各人に小銃すら配当し得なかつたので人員数の割合に直接の戦力として発揮されず、築城、後方業務等に多くが振り分けられた。

昭和19年7月12日帝国在郷軍人沖縄支部は防衛隊を地区毎に編成し、作戦に方り部隊の指揮下に入れる方式も採用されていたが、武器の配当は殆んどなく、その上兵団の配置がしばしば変更されたことは防衛隊と配置部隊との連携が悪く、作戦上にも訓練上にも不利となつている。

防衛召集の本質と沖縄配置部隊の兵力からして防衛隊との指揮系統を早期に確立し、武装を準備し、指導を強

化したならば相当の戦力が発揮されたであろう。
防衛召集事務は一般に連隊区司令及び市町村の兵事係の
努力により整齊と実施されているが、敵上陸頃より後の
手続は臨機的行われたものもあつたようである。

明治時代における屯田兵の設置は防衛召集と同質のも
のと観察されるが、平常から被服、武器は準備されてい
た。

(2) 男女中学校生徒の戦力化

男女中学校生徒の戦力化は兵役である防衛召集とは異
なり義勇隊によるものである。

国民の戦力化については法的措置としては人的、物的に
多くの法令が制定され、沖縄作戦前から着々強化されて
いたが、その主流をなすものは物的戦力力の増強（軍需
品の生産増強、物資の統制、徴用等）、防空対策（軍需
生産の防護、被害防止等）、国民生活の安定（生活必需
品特に食糧の増産確保等）であつた。

生徒の動員に関係する主要な法令は次のようである。

国家総動員法（昭13.3.31 法律55号）

国家総動員法に関する法規）

学徒動員令（昭19.8.23 勅令518号）

女子挺身動員令（昭19.8.23）

国民動員令（昭20.3 勅令94号）

本令は学校卒業生使用制限令、国民徴用令、労務調整
令、国民動員報告協力令、女子挺身動員令等が統合強
化されたもので前記の法令は本令の施行により廃止さ
れた。

義勇兵役法（昭20.6.21）

沖縄の義勇隊の編成は軍、官から相当強力で指導された
が、その源泉は、国民総動員の流れであり、島民の感情
と必要性から作戦戦いに直接寄与せんとしたもので、強
制というより自発的精神の発露の色彩が強い。（当時
の国民感情は一億特攻の精神に溢れていた。）

義勇隊の組織に関する事項は昭和20年3月23日閣
議で決定され、本土においても遅ればせ乍ら武装義勇隊
の編成に着手されるに至つたが、義勇兵役法として成立
したのは6月21日で、まさに沖縄戦終了のときである。

戦後義勇隊員の身分取扱について問題を残したが、義
勇兵役法が早期に公布されていたならば、指導処理も容
易であつた。

32Aは男女中学生の動員準備として精神教育のほか、
女子に対しては看護、訓練、男子に対しては通信訓練そ
他の戦力訓練を実施するため所要の将校等を派遣して
いる。

敵上陸前においては、築城作業の支援を主とし、敵上
陸後は各部隊に配属されて各種の戦力任務についている。

これらの部隊が編成されても装備すべき武器の余裕も
なく手榴弾が携帯武器の唯一となり、装備上からしても
新込隊、通信要員、遊撃隊、伝令等の任務にふり向けら
れる結果となつた。

相当程度の装備がなされ、適当な将校、下士官を充当し
て編成されたならばその若さからしても勇猛な部隊とし
て戦力を発揮し得たであろう。

④ 作戦開始前における非戦闘員の疎開に対する指導

32Aとして非戦闘員の島内疎開はその作戦方針からして国頭地区を要請し県当局もこの線に沿って住宅資材の収集、糧食の集積を行つたが、未だ不十分のうちに戦闘が開始された。

軍政下にないため軍としての指揮権、強制力はなく官の指導によつてなされた。また軍として疎開の裏付けとなるべき糧食等のあつせんに余裕がなく、強力な要請も多少遠慮されたと考えられる。

敵上陸直前の国頭地区への疎開も、早期に警告されて敵の砲撃を受ける前より計画的に指導されたならば更に整齊に実施されたであろう。

作戦開始前の島内疎開の範囲は首里、那覇、中頭地区の住民を国頭地区に疎開させることを主とし、島尻地区の住民は殆んど考慮されなかつたようである。

島尻地区の住民を国頭地区に疎開させることは、島尻が主産地であることや国頭の広さ、食料事情よりして困難であつたであろう。

国頭地区が疎開地と指定されても遊撃戦地区となつて部隊が配置されていることは非戦闘員が戦闘にまき込まれることとなる。

軍主力の掩護下を離れて生命の安全も生活も保証されていない地区への移動は実施に困難を伴うのは当然である。疎開地区の食糧事情が豊かであつたならば、疎開実施は簡単に容易であつたであろう。

非武装、中立地区の宣言等も考えられるが、当時の一般攻撃の国民感情、敵愾心、恐怖心等からしても容易に許さなかつたであろう。

④ 作戦間における非戦闘員の避難についての指導

各地区の様相によつて異なるがその概要は次のようである。

(1) 島尻地区

敵上陸より首里戦線までの戦闘間において、首里戦線以南の住民は、戦況(戦場)の推移について軍より明示されることなく主として官の指導により、その全域にわたつて食糧の生産確保、軍の後方支援の協力等に努力していた。

首里戦線後退にあたり一部住民に対し知念半島地区への退避指導が軍、官よりなされたが、時すでに敵と紛戦混戦の時機で、その進路は阻止されていきおい喜屋武地区に流動し混雑を生じた。

早期に知念半島地区を指定して指導されたら、混雑も緩和され犠牲も減少したであろうと結果的にいえる。しかしながら当時の情勢で知念半島方面への敵上陸の算と軍主力の知念半島地区への後退を考慮していたこと等よりして軍は早期に知念半島地区を指定することが困難であつたと想像される。

(2) 国頭地区

軍作戦の全般指導よりして、持久作戦地区とされ、かつ本島住民の疎開地として指定されたところである。

国頭支隊の作戦が遊撃戦的に行われたが全般的にはその行動は住民と切り離されたものであつたので、疎開した住民は個々の行動に陥り敵手に落ち、あるいは山地を

る米り状態となつた。

遊撃隊の遊撃戦はある程度住民の基盤協力の上になされたが住民の生活、退避行動に対して指導されることはなかつたようである。

国頭地区の住民は結局なりゆきまかせとなり、軍として強かに指導することは軍の戦力上からも、食糧事情からもなし得なかつた状況と観察される。

(3) 慶良間列島地区

慶良間列島の非戦闘員の取扱については記録、書籍に痛ましい記事が見られるが、慶良間展開の時機も遅かつたその作戦準備は水上出撃に全力が注がれ、敵上陸前陸上の陣地構築すら殆んどなく予め住民対策を準備する余裕がなくて、上陸軍を迎えた状況である。部隊として作戦第一主義、防諜（通敵行為の防止）等を重視した結果不幸な結果が生じたものと思われる。また慶良間列島には敵の上陸はないのではないかの安易さも多少あつたようである。

4 義勇挺進部隊の編成とその実戦時にこの種部隊に期待し得る限度

沖縄における義勇隊の編成は概ね適切に組織されたものと考えられる。これら部隊の戦力を発揮せしめるのは編成・装備・運用にある。

a 編成

学徒による編成は平常の組織がそのまま生かされ、その上教育も齊一で年齢も若いので最精鋭である。学徒以外による編成は入營、臨時召集、防衛召集の残り人員からなつているので老幼で訓練極めて未熟であるから素質劣等となることはやむを得ない。

素質により編成し玉石混じりを避けて運用を便にする着意が必要である。

b 装備

防衛召集に装備する武器すら不足する状況であつたので旺盛な精神力に拘らず竹槍、手榴弾が主武器となり、斬込隊、肉攻隊に多少の小銃、爆薬が配当されたに過ぎない。被服、糧食も十分でなかつたので戦行動中に糧食の取得という重大問題が付随していた。

c 運用

女子部隊を衛生関係に充当するのは当然の処置であつたが一部の者は挺進斬込すら志願している。

男子学生隊は訓練と装備の関係上、通信部隊、遊撃隊等に比較的多く配当せられ、一般部隊に配当されたものは挺

進断込等の直接戦斗行動に参加するほか、築城作業、伝令勤務等に従事している。装備を良好ならしめ、良好な指揮官を充当したならば偉大なる戦力を発揮したであろう。その他の義勇隊は学徒部隊に比して素質は劣るが防禦戦斗であるので指揮官と装備との配当を宜しきを得れば相当活用し得たであろう。

前述のように部隊の配備をしばしば変更したことはこれら部隊の指導に大なる損失であつた。

わが国の義勇兵の最近の例は明治維新の奥羽討伐の二本松城、若松城の防衛に見られるが、当時においても愛護心は旺盛であつたので装備は刀剣が主で貧弱であつたが老人組は直接城郭の防衛、若年者は城外の戦斗に活躍する等相等の戦力を発揮している。国土防衛という観点からして非戦斗員の避難、義勇隊の編成は真剣に考慮されるべき問題である。

5 非戦斗員の避難行動及び損耗の実態

a 作戦開始前における非戦斗員の島内疎開が進捗しなかつた原因

(1) 住民疎開に対する強制命令の法的根拠が明確でなかつたこと。

前述の「戦場地帯の行政責任」の項において論述したように強制という点では当時としては戒嚴の布告が法的強制の発動に有利であつたと考慮される。

(2) 疎開地の安全が保証されていないこと(軍に対する信頼)

疎開先である国頭は激戦の過中でないことは判断されるが砲火から遮断されることは保証されていない。軍に対する信頼は自らその庇護内に留る気持が生ずることは当然である。

(3) 疎開地における生活に不安を有すること。

疎開先の生活特に食料事情が不良であることは現在の居住地から去ることは容易なことではない。また居住設備も、軍隊と異り簡単に露営をする気持にはなれないであろう。

(4) その他

疎開の計画の不備、裏付（糧食の確保等）の不十分、輸送機の不足（殆んど皆無）居住地に対する愛情等は疎開の進捗を阻害した。

戦斗末期、島尻地区において非戦斗員に大なる損耗を生じた原因

(1) 戦斗員と非戦斗員の区別が困難であつたこと

外貌、服装等においては一応の区別はできるが精神的の区分は非常に困難な点がある。総力戦、一億特攻の国民感情は老幼男女あけて軍に協力したので軍民の分離が行動的にも困難であつた。

(2) 敵の対住民処理に対して疑念、恐怖、敵愾心をいだいたこと。

上陸した敵が非戦斗員に対して如何なる態度をもつて臨むかは万人が不安と疑念をいだいていたことは宣伝、想像、敵愾心から当然のことである。米軍は非戦斗員の分離、投降の勧告を自ら行うとともに島民を使用して行つたが、住民は敵愾心、疑念と恐怖よりして容易に応じなかつた。自尊心、民族の誇りから自決する者もあつた。

(3) 軍官の指導適切を得なかつたこと。

非戦斗員の避難地区は軍から知念半島地区と指定されたが、前述のように時機が遅れ敵情から実施困難となり、住民への伝達も不十分であつた。したがつて狭小地区に軍民が混在したため利用すべき壕も不足し戦火の直接被害を蒙るにいたり、さらに敗残負傷兵の住民混入は米軍の攻撃の対象となつて被害を増す結果となつた。一部軍人が住民の投降を阻止したことも被害を多くした一因となつたようである。

6 参考所見

外地における現地住民に対する軍政宣撫工作等については満洲事変以来活潑に研究施策されたが、国内戦場における国民の処置については大東亜戦前には大なる関心がはらわれていなかった。

国内が空襲を受けるに及び前線と銃後の区分が段々に薄らぎ、空襲被害の増大に伴い都市疎開が急務となり、サイパン失陥により敵の直接上陸に対処していかすべきかが真剣にとりあげられるようになった。

20年1月頃いよいよ強力に推進するように努力されたが終戦まで透徹した判決に達しなかつた。

抽象的には各種考えられるが実施の点において裏付となる国力の不足よりして結局なりゆきまかせの形となつたようである。

沖縄作戦において住民の処置上問題となつた主要な点は次のようである。

- (1) 非常(強権)の法的不備
- (2) 食糧事情の不良
- (3) 防衛組織の指導不十分と之に伴う武器資材の不足
- (4) 疎開の不十分

国内戦場における国民の処置は各国とも困惑した問題であつた。将来における戦争(戦斗)態相に大なる変化が予想され、その上政治思想の複雑化、人権尊重の向上は処置上益々困難複雑を増して来ている。これらの問題研究にあつては戦史的には沖縄作戦、独仏戦場、独ソ戦場のほか、内戦の朝鮮戦争、中国内戦等は多くの示唆が得られる。

これらの観察にあつては政治、思想、思潮、産業、経済、外交等極めて広範囲からの観察が加味されなければならない。

沖繩作戰の觀察

(主務者第2次案)

第5 米軍の作戰戰鬥および民政

目 次

第5 米軍の作戦、戦斗および民政

1	進攻作戦全般計画	5-1
a	作戦目的と目標の選定	5-1
b	作戦標相判断と作戦段階	5-2
c	兵団運用の構想	5-4
d	沖繩作戦が本土進攻作戦準備に及ぼした意義	5-5
2	上陸作戦方式とくに陸海空戦力の統合	5-8
a	上陸前における状況知得の程度	5-8
b	上陸正面の選定	5-8
c	事前の阻止作戦	5-11
d	上陸前における砲撃の様相	5-13
e	上陸と揚動について	5-14
f	飛行場、揚陸場設定速度	5-15
3	主要な各時期における作戦指導	5-21
a	4-03における10A長の決心と XXIVの攻撃目標について	5-21
b	伊江島攻略の時期について	5-23
c	XXIVの首里陣地に対する第1次総 攻撃の方針について	5-25
d	4月下旬における新上陸の要否と 第2次総攻撃について	5-26
e	5月末における首里包囲の構想と追撃の発動	5-29
4	堅固な陣地の攻撃における戦術および戦法	5-33
a	情報活動	5-33
b	統合総合戦力発揮の程度と攻撃成果の関係	5-37
c	弱点の看破と利用	5-43
d	迂回包囲機動の活用	5-46
e	対洞窟陣地戦法	5-47
f	対夜襲戦法	5-49

b	編成、装備および訓練の戦斗に及ぼした影響	5-51
5	対住民施策	5-57
a	軍政機関の組織と運用	5-57
b	対住民指導および処理の方針	5-58
c	占領地区における治安警備	5-59
d	心理戦	5-61
6	人事および兵站支援	5-63
a	要旨	5-63
b	各種戦術行動と損耗との関係	5-64
c	補充、部隊交代、賞罰	5-65
d	補給、収容後送、基地建設	5-68

1 進攻作戦全般計画

a 作戦目的と目標の選定

(1) 作戦目的

当時の対日基本戦略は、日本を敗北させることは必至であるが、いかにして時間と人命の犠牲を最少限にとどめ、なるべく速やかに無条件降伏させるかに腐心していたのであつて、これがため琉球に日本圧迫の土台となる海空基地を獲得し、本土上陸に最も有利な状況を最短期間に作成することが本作戦の目的であつた。

この基本戦略は当時の日米戦力関係から見て適切であつたと考えられる。なお本作戦の終始を通じて作戦目的は常に明確であり、あらゆる計画、指導が迅速な海空基地獲得に集中された。この結果米軍はわが324の戦斗にも拘らず着々として琉球に海空基地を建設し、本土進攻の態勢を確立するに至つたのである。

(2) 作戦目標

米軍の最初の計画はまづ台湾に基地を獲得するものであつたが途中変更されて直接琉球に進攻することとされた。琉球は台湾に比べれば、対本土作戦のため直接的運動的成果がえられる。しかし、実行の可能性からみれば陸上作戦は兵力によく適合するけれども、航空作戦はより困難になることが自覚されていた。当時彼我両力戦力の差は増大し、米軍としては作戦距離の増大に対する自

信を有したため本目標を選定したのであるが、これは結果から見ると成功を取めた。

琉球内の個々の目標を3段階に分けて占領するよう選定された。実際においては、第3段階作戦を中止して沖縄周辺にのみ留められたが、それは各島嶼の航空基地建設の適性に関する事前の情報収集の不十分によるもので、制空権獲得の程度と事前に知得できる情報の限界の関連を示している。

このような場合、予備目標の意味を以て第3段階作戦を計画に組み入れておくという考えであるなら、適切な計画と言えよう。

D 作戦様相判断と作戦段階

(1) 作戦様相判断(含可能行動判断)

(a) 日本軍が、航空特攻、海上挺進攻撃を組織的に大量集中するであろうとは予想され、かつ、準備を整えられてはいたものの、実際には遙かに予想を越える凄まじいものであつた。

それは日本軍が尋常一様の方策を以てしては大勢を挽回し得ぬことを自覚し、レイテ作戦の教訓に基き、将兵全体が異常の決意を以て捨身の戦法に出たためである。

(b) 日本軍の可能行動判断が周密を欠いた。

戦場が嘉手納周辺の上陸地付近の場合における日本軍の上陸防禦(含逆襲)および攻勢ならびに久場一茶谷付近の防禦についてはよく検討されていた。

しかし、戦場が宜野湾村以南とくに首里周辺地区となつた場合の日本軍の可能行動について研究不十分という過失を犯した。その原因の最大のもの、上陸防禦における日本軍の慣用戦法「敵が橋頭堡確立前に逆襲または攻勢に出てこれを撃滅する」この既成概念が強く米軍統帥者の頭にあつたためであろう。

この結果、琉球作戦の努力の重点は、沖縄上陸作戦の1点に集中せられ、嘉手納周辺の作戦が琉球作戦の山として施策が講ぜられた。

上陸が予期に反して極めて容易に実施され、戦場が内陸における陣地攻撃となつたとき、不用意な調整のない攻撃を繰返して大きな損害を招き、あるいは激烈長期の戦いのため兵站支援の不足が作戦を制限する等に悩まされ、苦しんだのである。

この可能行動判断の誤りは、単に、日本軍に裏をかかれたから、止むをえないとしては済まされぬものであり、ルソン作戦の経験をよく観察すれば、さらに至当な判断がなされたであろう。

従来からのニミッツ軍とマックアーサー軍の不仲、不運が、相互の戦訓通報を不円滑ならしめた原因になつたものと観察される。

(c) 大島嶼における相当に準備された組織的陣地の攻防戦における様相判断

前記可能行動判断の誤りに関連し、計画段階からの確な様相判断をすることは困難ではあるが、あまりにも判断が甘かつた感がある。

中部太平洋軍としては、最近のペリリュー、硫黄島作戦により、堅陣攻撃の経験を味つていたのであるが、戦場はさらに広い大島嶼であること、日本軍の兵力量、

準備期間、本土との距離等により戦斗はより激烈かつ長期にわたることの考察に欠けた点があつた。

(d) 日本軍兵力の寡少判断

原因は現地召集、民間防衛組織について予想できなかつたことである。

太平洋の各地では未経験であるが、西欧、東欧の戦闘を見れば、国内作戦の一特色として、当然判断せらるべき事項である。

(2) 作戦段階の区分

第1期(中、南部沖縄の占領)、第2期(伊江島及び北部沖縄の占領)をもつて沖縄における主要な空海基地を占領し、第3期に琉球の他の目標を奪取しようとしているのは、よく目的達成に合致している。

また、状況により、第1期作戦の完遂に先立ち、あるいはこれと併行して第2期作戦を行うことが計画されていたことは、計画の融通性より見て適切である。

しかし、第1期の期間は実際には計画の2倍を必要とし、琉球作戦の全般計画だけでなく、日本本土進攻作戦にまで大きな影響を及ぼした。この作戦経過予想が甘かつたのは、前記作戦様相および敵可能行動判断の誤りに起因するものである。

c. 兵団運用の構想

(1) 兵力の二重使用

XXIV〇はレ1テ作戦終了後沖縄に、第5艦隊は硫黄

島作戦終了後琉球作戦に使用される予定であつたが、その作戦遅延と海象状況等により、琉球作戦は1カ月遅延した。

VMOは硫黄島作戦後宮古島作戦に使用予定であつたが、損害大なため重MOを充てるより変更した。

これらの変更が全般計画に大きな影響を与えなかつたということは彼我総体戦力の懸隔の大、基本戦略の適切、兵団運用の融通性によるものであろう。

(2) 第20戦略空軍を戦術的に使用せざるをえなくなり、日本本土の戦略爆撃に支障を来した。

XXI爆撃隊は、その戦斗努力の約75%を沖縄作戦のD/Sに振り向けられたのである。

生産工業の中心である本土周辺においては、獲得した制空権の維持存続のために基地航空を必要とすることは十分に自覚されていた。しかし、諸種の事情により沖縄における航空基地の建設が計画より著しく遅延したことに大きな原因がある。

(3) 上陸兵団の運用

当初の上陸兵団4コD、増援可能兵団4コDを持つことができたが、作戦に相当した兵力であり、その部署は、兵力の集中、縦深戦力の保持の見地より適切である。

d. 沖縄攻略が本土進攻作戦準備に及ぼした影響

米国は日本をして最後まで防衛戦を行わせるよりは早期に降伏を逼らせる手段を原子爆弾という形で有していた。しかし、計画者としてはその成果を当にすることはでき

なかつたので、日本に対する最終進攻計画とソ連軍の参戦に関しては、沖縄作戦と併行して準備が進められた。

沖縄作戦では日本軍の予期以上の戦斗により、本土防衛作戦準備の余裕を与え、また、B-29の戦術的使用のため、本土戦略爆撃の効果が減退したとは言え全般的に次のような好結果が与えられた。

- (1) 計画以上に良好かつ多数の空海基地の設定により、日本に対する封鎖と爆撃を強化した。これにより、日本が早期に無条件降伏する一般情勢を作為するとともに、日本軍の本土防衛作戦準備の促進を妨害した。
- (2) 制空制海権を獲得し、本土上陸作戦のための素地を作り、かつ、日本軍陸海空の統合を破つてその抗戦力の主体を陸軍戦力におかしめた。
- (3) 欧州よりの転用兵力を再展開するための所要の地積がえられた。
- (4) 英ソ支との連合作戦、とくにソ連と連繫して行い日本処理、あるいはソ連の運出の抑止という点において行動の自由を大ならしめた。

。 参考所見

- (1) 米軍が作戦戦闘面においては幾多の戦術的失敗や波瀾があつたに拘わらずよく作戦目的を達成したのは、その国力及びドイツの打倒によりその努力を対日作戦に集中し得たこと等による所が大であるがその基本戦略の周密

適切に備せられる点も多くない。所謂勝ちのち戦うの態勢にあつたのであつて最高統帥は必勝条件を付与して作戦させている。なお、米軍がほう大な陸、海、空戦力を極めて組織的、合理的に運用發揮している点も見逃せない所である。

- (2) 次期作戦の作戦様相を的確に把握することは極めて困難である。

本作戦においても米軍はし本土に近い国土の大島嶼作戦の特色の判断が深刻でなかつたがため、戦斗は予期以上に激烈長期にわたつた。

- (3) 敵の可能行動の判断において先入主となることが多く、ために、各種状況の想定に欠けることとなり易い。米軍は本作戦では屢々上記欠陥を暴露しているが可能行動の判断と自己の情報収集機関に対する信頼度とは密接な関連をもつものであるから、収集審査した情報に対する過信もその一因と言えよう。
- (4) 兵団の経済的運用のため二重使用は計画を非常に複雑にし、かつ大きな危険を伴うものである。しかしてこれを可能ならしめる前提は、制空制海権の獲得と絶えず戦力を維持培養する兵站組織の確立にある。米軍においてはこの前提条件の達成度と予期する危険度との考察が周密に検討せられていたようである。

2 上陸作戦方式とくに陸海空戦力の統合

a 上陸前における状況知得の程度

米軍の上陸前における情報収集活動はあのような状況下では実によくやつたと言うことができる。

環海の沖縄に対し、密偵等による地上偵察は困難で、住民の利用、機密書類の入手によることなく、潜水艦による写真偵察、監視、航空写真の判読等により情報を得たと称しているが、それにも拘らず32Aの主要なOBと陣地配備の概要を把握し、上陸作戦の計画指導に遺憾なからしめた。

とくに、相当の広地域にわたる航空写真の詳細な判読により確認した個々の施設を基礎とした判断が、日本軍の実情の大綱を逸しなかつた点については、情報勤務の優秀さを認めざるを得ない。

個々の施設をいかなる程度に確認していたかを立証する資料はないが、それに基づき判断した総合観察が大綱を誤っていない点より見れば、相当詳細に把握していたものと看することができる。

b 上陸正面の選定

上陸正面選定にあたり主として考慮すべき事項は、○作戦目的達成が容易なこと。○上陸行動が容易なこと。○上陸地区は作戦規模に応ずる地積を有することである。

(1) 作戦目的達成のためには飛行場および港湾が重要な作戦目標である。飛行場としては、すべての既設飛行場の

獲得利用に努めるのが当然であり、艦隊基地としては、中城湾が必要である。那覇、与那原は補給用として価値がある。

従つて、本作戦目的達成のためには、最少限石川地境以南の沖縄本島と伊江島を確保する必要があるが、上陸正面より見る場合、嘉手納海岸は、読谷、嘉手納の2飛行場を迅速に獲得できる利点がある。

(2) 上陸行動は敵の配備、海岸の状況および海象により難易がある。

(a) 当時知りえた日本軍の配備から考えて、比較的抵抗が少く上陸できるのは渡具知海岸と金武海岸である。しかし後者は湾入しているので、当時としては未確認であるが機雷および湾口の火力による閉塞の危険が予想される。

(b) 珊瑚礁発達状況を見ると中城湾北半、知念半島東および南、那覇港外南北4~5軒の正面および永満正面の巾が大である。

比較的巾の狭いのは、海川以西の海岸、牧港正面、渡具知地区、与那原付近、金武湾の一部であつて、その形態からみて発達状況はあまり複雑でない。従つて上陸用舟艇の行動にはこれらの海岸が上陸に適すると思われるが、珊瑚礁の状況は、現地を踏査しなければ現在の資料だけでは十分でない。

(c) 海岸の地形

海岸付近の断崖、海岸を襲撃する高地の状況、内陸交通網等より見て最も良好なのは渡具知-北谷-牧港

海岸であり、次で金武海岸である。糸満海岸、淡川海岸、中城湾海岸は高地帯が連なり、海岸および内陸の接近経路を扼している。

(d) 風浪の影響

西海岸は3月までおよび6月以降、南海岸は6月以降恒風の影響があると考えられるが中城湾、金武湾内は風浪の影響が比較的少ないものと考えられる。

従つて、干満の差の影響の最も少ないのは、珊瑚礁の関係より見て金武湾岸ついで渡具知、淡川正面である。

(3) 各海岸方面の地帯がいかなる程度の作戦規模に応じ得るかを見ると、

渡具知海岸は、米軍戦史においても2コ軍団とその協力部隊に応ずる龐大な軍需品の揚塔を処理できる唯一の海岸であると述べているとあり最良の条件を具えている。小隊一糸満海岸、知念半島北側海岸、牧港海岸および、淡川正面はいずれも上記の観点からみて軍主力の作戦及びその支援には不満がある。特に淡川正面は揚塔可能な正面と沿岸の地帯が狭小である。

(4) 米軍が渡具知正面に上陸地区を選定したのは、その上陸時機を4月初旬とすれば、戦術的、技術的に当然であると考えられる。

(5) 東海岸上陸の予備計画について

本計画によれば、淡川、知念半島地区に2コD、与那原北方中城湾海岸に2コDが逐次上陸するのであるが、渡具知海岸上陸の場合に比し各種の面より見て困難性が大である。この際、金武湾には敷上陸が計画されたが、

東方諸島が占領されたのちならば、金武湾への船団の進入は容易となるので、真上陸を計画することも考えられる。

しかし、この予備計画を実行する場合はどのような状況か、実行する公算をどの程度と考えていたかは不明である。

○ 事前の阻止作戦

(1) 目的と目標

事前の阻止作戦の目的は、主として沖縄島に対する日本軍の航空支援の阻止と、海上増援の遮断である。

阻止のためには、米攻する日本軍航空機の艦船進撃とその基地の攻撃を実施せねばならないが、事前作戦では主として、九州、台湾における基地が目標となつた。しかし、航空機、艦船の機動性と日本本土作戦の特性上九州、台湾のみに限定できず、広く生産地帯、本土西部奄美諸島にまで及んだ。

(2) 手段

九州、台湾の日本軍両航空基地からの脅威に対し、前者には58TF、208AFが、後者には57TFと比島の5TAFが制圧阻止に任じた。

しかしながら艦載機による攻撃では、日本軍航空機の減耗には効果があつたが、基地および生産施設の徹底的破壊を実施せねば阻止効果を持続できないのであつて、B-29の勢力、陸上基地の關係上、事前にそこまでの成果を取ることができなかつた。

(3) 期間

琉球作戦は、小笠原、比島作戦と密接な関連を以て実施され、これら作戦のために行われた制空作戦も間接的には琉球作戦に寄与するところがあつた。

ルソン上陸のため実施された1-03、04の台湾の航空攻撃、硫黄島作戦支援のための2月下旬からの本土一帯、奄美諸島に及ぶ攻撃は直接的な効果があつたので、琉球作戦のための阻止作戦は約3カ月前から開始されたと見える。

しかし、本作戦のための直接的な阻止作戦は58TFが3-18九州飛行場、19日に本州西部および四国飛行場および神戸、呉、広島の艦船を3-28、29には南部九州飛行場を又同日頃57TFが先島諸島を攻撃し、阻止作戦は約2週間前から本格化したのであつた。

註 10-10の那覇空襲以降、琉球阻止作戦が開始されたとの見解もある。

(4) 総体的成果

(a) 日本軍の航空戦力温存方針の間は大きな成果はなかつたが、3月下旬、海軍航空が積極方針に転換したので、一挙に阻止作戦の成果を挙げ、上陸初動における日本航空の反撃を困難ならしめた。

(b) 兵力の関係上徹底的な事前の阻止作戦が実施できなかったため、上陸作戦開始後、57TF、58TF、および52TFは激戦が主となり、さらに、沖縄における陸上航空基地設定の遅延により、B-29の戦略爆撃隊は、その主勢力を九州、西部本州の飛行場攻撃に指向しなければならなかつた。

(c) 海上交通は3日以降、殆んど完全に遮断したと言え、日本軍の所要軍需品の大部はすでに輸送完了後であつたため、予期に反して324の長期かつ激烈な戦闘を遂行させることを得さしめた。

(d) 航空による阻止作戦の成果は、陸上および海上交通に対しては、殆んど絶対に近い阻止威力を発揮するが、航空基地等に対しては完全制圧ができず、日本軍は奄美諸島のように沖縄に近い地域においてさえ、中継基地としての機能を終戦時まで保持したのである。

d じ前における砲撃の様相

(1) 目的

沖縄島に対する米軍上陸前の砲撃は、○ 航空優勢獲得のため飛行場に対する砲撃、○ 輸送遮断のための港湾、船舶等に対する砲撃、○ 上陸行動を容易にするため上陸開始に先立ち妨害を排除するための破壊制圧の砲撃に分類できる。

(2) 規模

(a) 54TFは、BB×10、CA×11、DD×20その他砲艦等を以て3-25より7日間に5162トンを地上目標に指向した。

(b) 58TF、52TFは同上期間に3095回の出動を行つた。

(3) 艦砲射撃の様相

艦砲弾5162トンが、那覇一小浜半島地区6軒内外正面及び渡具知海岸の約15軒正面に射撃されたものとして、これを10日艦弾に換算すると7日間に10米正面平均約160発が発射されたこととなる。

(4) 米軍戦史では縦深地域に対しても相当の成果を挙げたと記述されているが、日本軍は洞窟により損害を避けることができた。準備の周到とくに築城施設の完備により損害は避け得られるが、機動力発揮には相当な制限を受けた。

○ 主上陸と陽動について

(1) 4-01、湊川海岸に対して実施された欺上陸について米軍は日本軍主力を南部地区に抑留したと考えたが、32Aとしては既定方針どおり行動したのであつて、米軍に致されたとは考えられない。

また、海上射撃も制限していたので、物的損失も少かつた。

(2) 以後における南部地区海岸に対する艦砲射撃、船舶の航行などによる示威行為、さらに、4-19の第2次欺騙上陸などの相当長期にわたる諸行動が日本軍主力を、長く南部に拘束しておく上において効果を挙げている。

2 飛行場、揚陸場設定速度

(1) 飛行場設定状況

(a) 読谷飛行場

4-01	滑走路を観測機用に整備
4-07	戦闘機隊用に応急整備
4-10	業務運営上の施設完成
5月末	戦闘機用1本概成
6-17	7000呎の中型爆撃機用滑走路完成

(b) 嘉手納飛行場

4-01	滑走路不時着用に整備
4-09	戦闘機隊用に応急整備
4-10	業務運営施設完成
5月末	戦闘機用1本概成
6月末	7500呎のVLR発着路25%完成

(c) 泡瀬、金武飛行場

6月末	5000呎の戦闘機用発着路準備完了
-----	-------------------

(d) 残波飛行場

6月末	8500呎のVLR発着路1本15%完成
-----	---------------------

(e) 普天間、牧港飛行場

6月末	VLRおよび中型爆撃機用発着路
-----	-----------------

設中

(2) 伊江飛行場

4-30 滑走路修復
5-10 戦闘機隊用の基地構成
5月中旬 誘導路、滑走路、レーダー、警報管制設備完成
6-14 4コ戦闘機隊用に構成

(2) 飛行場利用状況

(a) 読谷飛行場

4-9 1コ戦闘機GP到着、直ちに活動開始
7月中旬 重中爆撃機使用

(b) 嘉手納飛行場

4-9 1コ戦闘機GP到着、直ちに活動開始

(c) 伊江飛行場

5-14 3コ戦闘機GP 1コ夜間戦闘機GP活動
5-17 P-47 九州攻撃開始
7-02 B-29による九州偵察
7-10以降 中重爆による九州各地を爆撃

(3) 飛行場設定を容易ならしめた要因

(a) ニミツツの意見によれば沖縄作戦における兵站業務の主眼は空海基地を迅速に整備して今後の対日攻勢に資することであつた。この方針に基いて所要の部隊資材を迅速に揚陸し、早期に整備に着手する計画が周到に樹立されていた。

(b) 琉球における飛行場は、沖縄島周辺におけるもので十分であつたので、宮古島、徳之島、喜界島、大東島等に作業力を分散しなくてもよかつたこと。

(c) 日本軍は伊江飛行場は徹底的に破壊したので修復に日時を要したが、その他の既設飛行場は直ちに利用することが可能であつた。読谷、嘉手納飛行場は、僅か1日で応急修理を終了した。

(4) 飛行場設定作業が計画よりも遅延した理由

(a) 気象および日本軍特攻の妨害並びに那覇港等の占領遅延のため建設資材の揚陸がおくれたこと。

(b) 予定建設作業人員が獲得できなかつたこと。

(c) 5月の雨期のため、飛行場建設人員が作戦道路建設に利用せられたこと。

(d) マリアナ作戦等の場合に比すれば、沖縄では戦士しつつ建設せねばならぬ不利な状況であつた。しかし、総合的に見て、概ね順調に実施され、作戦支援に支障

を来さなかつたものと見られる。

(6) 揚陸場設定状況

(a) 補給基地としての那覇港、与那原港の早期占領ができてなかつたため、6月末までの揚陸作業の大部分は嘉手納海岸において実施された。4月中旬以降、東海岸の各地に揚陸場が設定されたが、全揚陸量の80%は嘉手納海岸であつた。

6月末以降、那覇港が逐次嘉手納海岸に代る計画であつたが、終戦時においても未だ那覇港湾施設は未完であつた。

(b) 揚陸施設の建設状況

○ 嘉手納海岸

4-04 LST用T型、U型栈橋各1コ完成。その後間もなく一本道路栈橋6コ、L型栈橋1コ、砂土製栈橋数コ完成。

○ 臨時揚陸場

4月中旬より、石川、勝運半島、泡瀬、久場、比謝河口に舟用栈橋を構築。

○ 与那原港

5-22採取、6-01使用開始、1W後にLSTと小型船船用舟橋栈橋の構築開始。
6-12完成

○ 漢川

6-04占領。6-12完成。2W運営

(6) 揚陸場設定速度に影響を及ぼした要因

(a) 地上作戦の進捗が遅延したため、補給品の需要を増大したに拘わらず、所要港湾の占領が早くれたこと。

(b) 日本軍特攻による揚陸施設建設および揚陸作業の妨害

(c) 悪天候による作業の困難性

(d) リーフのため海上運航路、揚陸舟艇の使用制限を受けたこと。

(7) 揚陸場設定速度が作戦に及ぼした影響

(a) 設定作業そのものは容易ではなかつたが、よく作戦上の要求に即応するよう迅速に行われ兵站支援に大なる支障を来すことはなかつた。その原因は平常より兵站を重視する思想により弾力性ある事前準備がよく行われていたので、次々に応急処置を講ずることができたためである。

(b) 本島の揚陸場付近は碇泊に不便であり、リーフによる船舶の接岸が困難であつたが慶良間諸島は良好な泊地を有し、その欠点を補うため極めて有効であつた。

参考所見

沖縄上陸作戦は、第2次大戦型のほゞ完成された方式に

において、極めて放胆な構想と着実な計画を以て実施された。

すなわち、陸上航空基地からは遙かに離隔し、長大な進攻距離と複雑な兵站条件下で、本土近くの目標に一挙進攻した。そして上陸作戦は、幾多の不経済な面を伴ったが最も堅実な正攻法により実施したのである。

これらを通じて、必要性と可能性、価値と代償、等の検討に関する考え方がはつきりとうかがい知ることができる。

5 主要な各時期における作戦指導

6 4-03における10A長の決心とXXIVCの攻撃目標について

(1) 10A長の決心について

(a) 10Aは、4-03、予定より遙かに早く橋頭堡地域を占領できたので、日本軍の状況が不明であつたに拘わらず戦機を捕捉して速やかに地歩を拡大させるため、両軍団に進攻を命じたのは、放胆でかつ時宜に適したものであつた。

(b) しかし日本軍主力との決戦に先立ち、ⅢM〇に対して第2段階に予定した作戦を実施させることは、もし日本軍が攻勢に転ずるとき、米軍は兵力分離のため大きな危険が生ずるので1MDを中頭地区に配置し、27Dを嘉手納海岸に上陸させる処置をとり、さらに、77Dは海上において待機させるなどの慎重な配慮がうかがわれる。

(c) 本決心は、10Aとして沖縄作戦間における最も放胆な決心であるが、その原因は当時までの作戦が極めて順調に実施せられたためであろう。

(2) XXIVCの攻撃目標について

(a) XXIVCは、7D、96Dの戦斗地境を変更し、この2コDを南方に対し併列し、4-04、攻撃目標を

浦添村—上原—和宇野の地域に設けて攻撃させた。

(b) その結果、目標の遙か手前において堅陣に遭遇し、敵情不明、未調整の攻撃を実施して多大の損害を蒙つた。

(c) 目標が、過遠となつた原因は、当時米軍の情報は、沖縄の日本軍の兵力、企図を明確に把握していなかつたためである。従つて、日本軍主力が首里付近に居ること。その陣地が極めて堅固であることが予察できなかつた。事前偵察による航空写真では、首里地区は、雲のためその地形さえも確かでない程であり、又上陸後の航空偵察では日本軍陣地は偽装遮蔽が徹底していた。なお、住民補遺からの情報では、嘉手納地区の日本軍主力は、南方に退避したと述べていた。

このように敵情地形は不明であつたが全般状況は有利であり、速やかに南進できると判断し、かつ、南部沖縄進出のための第1の要線である浦添村高地—上原高地をCの中間目標とし、これを各Dの攻撃目標としたものと思われる。

(d) 米軍は4-04~14の戦斗を経て始めて日本軍の戦斗力、防禦状況が明らかとなつたのであつて、この期間の戦斗が、A全般から見れば威力偵察的成果ともなつた。また、日本軍主力の北方転用以前にその第1陣地帯の半分近くを奪取し、次の総攻撃のため有利な態勢をつくることができた。

しかし、これがために支払つた代償はあまりに大であり、部隊の再編成、補給品の再集積等のため次の総攻撃開始までに1Wの準備期間を必要とするに至つた。

b 伊江島攻略の時期について

(1) 伊江島攻略と南部沖縄におけるXXVの総攻撃(4-19以後)とが同時期に実施される結果となつたため、10Aの兵力は沖縄本島全部に支分されることとなつた。これがため、伊江島作戦が4月における主作戦に何ら寄与することがなかつたばかりでなく、悪影響さえも与えたのであつた。

その原因は、上陸作戦成功による楽観的気分が、日本軍戦力を寡少に見積り、また可能行動判断を慎重に行わず、XXVの南部沖縄攻撃、且Mの中、北部沖縄の占領、77Dの伊江島奪取は容易に行いうると考えたためであらう。

10A長は、4-05、南部沖縄の攻撃と併行し、中北部沖縄の占領を決意し、4-11まず、伊江島を奪取したのち、4-19からXXVに総攻撃を開始させる決心を取つた。しかし、10A長が次のような方針を明確に立てていたならば、一貫性ある戦斗指導ができたのではなからうか。

- 第1次 且Mの本部半島の制圧とXXVによる南部沖縄の制限目標の攻撃
- 第2次 伊江島の奪取占領
- 第3次 X-XVの総攻撃

(2) 伊江島上陸時機について

(a) 伊江島上陸作戦については、沖縄上陸以前より計画され、攻撃に任ずる77Dも事前に綿密な計画を立案し、準備を整え、海上で待機していた。従つて、4-10になされたターナーの伊江島攻略決定は主として

次の理由によると考えられる。

○ ⅢⅢⅠの本部半島の偵察が進み、4-16までには本部陣地を制圧して伊江島上陸の妨害を排除する見込みがついたこと。

○ 伊江島における日本軍の細部状況が判明し、その兵力は大でなく、迅速に攻略できると判断したこと。

○ 27Dの到着によりXXXⅠ方面に77Dを投入の必要とする懸念がなくなつたこと。

すなわち中南部沖縄の作戦の状況がこれを許すならばなるべく速やかに伊江島を占領することは米軍にとり極めて有利であり、伊江島の迅速な占領が達成されれば77Dの再使用も可能なところから本決定をみたものと推定され、日本軍の消極的な作戦が米軍をしてXXXⅠ正面の戦況を楽観させたものとも考えられる。

(b) 作戦経過の見直しについて

艦砲航空支援のもとに、1コD(-1コRCT)を以てすれば、長くとも数日以内に占領できると考えていたが、その判断の甘さは主として情報活動の不十分によるものであつた。

○ 日本軍の兵力および戦斗力の寡少評価

○ 事前における情報収集とくに堅陣に関する微候判断の不十分

○ 攻撃部隊である77Dの戦斗体験からくる過信(堅陣に関する認識の不足)

(c) 10Aは手段を尽せば、上陸開始日をさらに数日早めることが可能であり、伊江島占領の価値が増大したであろう。

しかし、本作戦の功罪を論ずるなら勿論成果が大であつて、マイナス面は、全般的に主動性の保持と戦力の兼深性によりカバーされた。といふことができる。

○ XXXⅠの首尾陣地に対する第1次総攻撃の方針について。

(1) 軍団の攻撃目標

(a) 優勢な艦砲、航空、大砲兵の支援により、各Dは、那覇一与那原の地域まで進出する計画であつたが、結果的には、その攻撃目標は過遠であつた。

その原因は、日本軍の防禦戦法、陣地の特性とくにその堅固性に関する認識の不十分によるもので結果、洞窟陣地の抵抗力を正しく把握していなかつたためである。

(b) 戦斗指導の間において、例えば4-19の総攻撃失敗直後において、当初の計画を修正し、城間一前田一幸地付近をObjとする案も考えられる。

(c) しかしながら、目標を遠くにとつていたがため4-26からの第2陣地帯に対する攻撃が迅速に実施できた一要因となつた。

(2) 兵団部署

牧港付近の地形上の弱点を利用して包囲に努めた着意は適当である。しかし、目標までの兼深に比べて、兵力の兼深性がなく独立軍団として予備が1コ1兵に過ぎな

かつた。

これがため西翼27Dの進出に伴つて隣接96Dとの間に間隙を生じ、27Dの衝力を減殺する結果も生じた。これは当時米軍としては洞窟陣地による日本軍の防御能力を過少評価し、戦斗の様相を楽観していたことに起因するものであろう。

- (3) 統合ならびに総合戦力の発揮については慎重周密に計画された。

しかし、TKの戦力発揮については不十分であつた。すなわち、事前における障害の排除、歩戦チームによる戦斗等に関する準備が不十分であつた。

TKの価値は、4月下旬の戦斗間逐次向上されたが4月上旬の戦斗では、未だその教訓を十分に汲みとることができなかつたためである。

- d 4月下旬における南部沖縄海岸に対する新上陸の要否と第2次総攻撃の構想

- (1) 10Aの新上陸に関する問題

(a) 10Aが新上陸を採用しなかつた最大の理由は、XXIVの戦力増強の必要があつたことと日本軍主力が防禦する南部海岸に上陸することは作戦的にも兵队的にも危険であるということにあつた。

(b) これを日本軍側から見ると、62Dの戦斗が米軍を陸正面に吸引するとともに南海岸における24D 44M.B.の威然たる存在が新上陸を断念せしめた。

となる。

しかし、時恰も4-22頃、彼我は任時を同じくして、一方は主力を北上させることに決し、他方は南海岸上陸を断念し、両者がともに陸正面において決戦を行うこととなつたのは偶然であらう。彼我ともに相手方の企図が不明であつたため、自主的に方針を確立し、直ちに行動を開始する必要があつたためである。

- (c) 10Aとしては、大部隊を以てする新上陸を断念しても、小規模の海上機動により、局部的迂回包囲を行わせ得なかつたであらうか。

4月下旬以降の米軍の作戦指導で、機動力の発揮に欠けているのは、それ以前の苦しい戦斗経験により、反動心理が伴つて、火力発揮に偏つたためであらう。

- (2) 10Aの第2次総攻撃の攻撃構想

- (a) 総攻撃開始の時機

早期総攻撃開始についての海軍側要望と新鋭兵団による旧第1旅兵団の部隊交代の必要性についての陸軍側の立場を考慮して予め計画が立案せられていた。

しかし5月4-5日における日本軍の攻勢失敗による戦力の減退、態勢整理の未完に乘じ速やかに総攻撃を開始することとし、それまでの間、所要の地帯の獲得と日本軍に対する圧迫を継続することとした。

周密な計画と戦機の捕捉が調和され大部隊の運用としては、手際よく実施されたものと言ふことができる。

(b) 10Aの攻撃目標

首里市周辺を攻撃目標としたのは、次の理由によるものと思われる。

- 日本軍は首里周辺を固守するものと判断し、他の可能行動についての関心が薄かったこと。
- 従つて首里の包囲により日本軍の主力を捕獲することができるかと判断したこと。

この計画は日本軍が飽く迄首里復讐陣地を固守するものとすれば適切なものであつたと言えるが実際は日本軍の後退に対する柔軟な作戦指導を阻害し知念半島一島尻地区進出が遅延する結果となつた。

首里以南地区の可能行動をも考えるならば包囲の部署はそのままとしても10Aとしては、知念一島尻地区に対する日本軍の後退も予想し、その場合の計画を作成しておくことが必要であつたと言える。

(c) 2コ軍団による両翼包囲の構想

1 両翼包囲の可能性

彼我戦力差が大であること。地形上包囲機動を許し、かつ有利であること。艦砲の密接な支援、とくに縱深支援が可能であること、戦果拡張に任ずる兵団を控置していること等により両翼包囲可能と判断したのは適当であろう。

2 両翼における突破に対する期待度

当初は西海岸方面において迅速な突破が実施できると期待していた。その理由は機動力発揮から見た地形の特性、日本軍陣地の堅固性、艦砲航空支援の難易、那覇港と小隊飛行場の早期占領、且MOが新鋭兵団であること等に期待したのである。

しかし、戦況によつては適宜主攻を変更すること

を予期していたのであつて、5-15、東海岸方面からの戦果拡張を期待して主攻を変更した。

主攻方面形成のため、10A長の使用できるものは、機動力のある航空攻撃、艦砲射撃および、控置してある7Dであつて、これらは適宜迅速に両方面に使用することができる態勢にあつた。

しかも戦場の巾が狭く、戦況の急速な進展を恐ぬ本状況においては、主攻変更による部署上の弊は少く、反つて相手の弱点を攻撃する利があるのであつて、このような融通性に富んだ戦術指導法が望ましいとも考えられる。

5月末における首里包囲の構想と追撃の発動

(1) 10Aは、5月末あくまでも首里包囲の構想のもとに作戦を進めたため、島尻方面に対する追撃の発動がおくれ、ために、日本軍主力を逃し、さらに組織的抵抗をなさせしめる結果となつた。

(2) 10Aは、日本軍の後退企図が察知できず、5-30まで、日本軍主力を首里付近に包囲する目的を以て攻撃を続行した。この場合、日本軍が島尻に後退する場合の対策は講ぜられていなかった。

5-31朝、日本軍主力は、無秩序に首里撤退中であると判断し、首里地区と島尻地区に日本軍を分断し、その主力を首里付近で包囲しようとした。

日本軍主力が首里撤退に成功したのを知り、追撃を発動したのは31日夕である。3日夕、日本軍が八重瀬岳地区で防禦するものと判断を下すまで、小羽みな追撃目

標を与えて追撃を実施した。

以上のように104は包圍→分断→追撃の部署をとつたのであるが、追撃の発動および追撃行動が極めて遅かつた原因は次のように考えられる。

(a) 情報収集の不十分

主として航空偵察によつたが雨期のため十分な活動ができなかつた。第1線の近距離偵察も不十分で、総合判断だけの資料が集められなかつた。海上からの島尻地区に対する戦力偵察などは実施されなかつた。

(b) 日本軍の可能行動の判断にあたり、先入主が強く、情報資料の評価判定、可能行動の公算考察においても適切を欠いた。

(c) 部隊の編制装備および訓練上の問題として、離陸地雨期における機動性に欠けていたことが追撃前進等の迅速性を妨害している。

(d) 日本軍の企図秘匿の徹底、欺騙処置の適切、後退行動の整齊迅速、および後衛部隊等の積極果敢な行動等により米軍を致した点が賞揚される。

参考所見

(1) 米軍の橋頭堡占領以降の作戦はすべて状況作戦指導とまつた。しかも、その多くは事前計画の範囲を出るものであつたが、終始主動の地位を確保できたため、その弊害も大きな悪影響を及ぼさず、反つて融通性ある作戦指

導をなすことができたのである。

(2) 敵戦力の把握と獲得した戦果の程度を判断することは極めて困難である。

戦力のうち、兵数や装備品数を把握することも容易でないが、これに無形の要素が加わると、正確に判断することは殆んど不可能に近い。事前の研究と交戦の結果により初めて真相に近いものが得られるであろう。

日本軍各隊の戦力判断が的確に出来なかつたがため、あるときは不用意な攻撃となり、あるいは慎重に過ぎる行動ともなる一因となつた。

個々の戦果は勿論、一般的に見て決戦が成立したか否かの判定を行うことも困難な問題であつた。

しかし、これらは状況判断を行う上において極めて重要な因子である。

今後においてもその的確なる判断方法につき研究しかつ修練すべき問題であろう。

(3) 4月下旬、米軍においては新上陸可否の検討が行われたが、時機を同じくして、日本軍においても主力の北上につき問題が起つていた。

両軍ともこの時機における戦勢と戦機を把握していたが相手側の意図がつかめず、双方とも自主的に行動方針を決定した結果が陸正面においてついに組むこととなつた。

暗中偵察の状態にある戦場の実相がよくわかれる。

(4) 攻撃目標選定について

XXIVの攻撃目標は当初いずれも結果的に過遠となつたが、これは、彼我戦斗力および戦斗推移の判断が適

切でなかつたことが大きな要因であつた。
可能性の程度の判断は極めて困難であることを物語つて
いる。

4. 堅固な陣地の攻撃における戦術および戦法

要旨

米軍は艦砲、歩、戦、砲、飛の圧倒的優勢な統合総合戦力を発揮して、長期間にわたり間断なく日本軍戦力を消耗させ、機に乗じ、日本軍の弱点に対し滲透攻撃を行うを特色とした。

戦斗指導にあつては、状況の変転に応じ部署を迅速に変更し、時に慎重、時に積極敢為、合理的組織的戦力発揮に努めている。

戦法としては、とくに洞窟陣地の処理、対夜襲戦斗法、火力支援調整等において日日の戦訓に基く創意改善に努め、著しい進歩を遂げた。

しかし、側背に対する感受性、機械力依存の度やや大に過ぎたため、機動力の発揮は不十分であつたと言える。

海兵軍団と陸軍軍団の戦斗力、戦法上の差は明確に現われず、むしろ各師団ごとの特色があり、また一般的に見て27D、77D、6MDは、他の師団が非常に火力を重視したのに比べれば、機動力発揮に努力している。

以下主要な戦術戦法につき説述する。

4. 情報活動

(1) 要旨

全般的に米軍の情報活動は活潑組織的であり、とくに、制空制海権を確保していたため、多角的な収集機関を利用することができた。

とくに、航空偵察、観測ならびに航空写真は優秀であり、また海軍との情報活動上の連携は適切であつた。

威力偵察は活潑に実施されたが、一般に近距離偵察には欠陥が多かつた。その原因は日本軍の警戒、対情報活動が、米軍の収集活動に優つていたためと思われる。

敵の戦力判断は、経験を経るに従い良好となつたが、当初は敵の可能行動の判断以上に困難であつた。

(2) 情報機関の編組

- 10A : 写真解説チーム、OBチーム、
CIC関係部隊(本管チーム、運用
チーム、分遣隊)
無線情報中隊、情報分遣隊。
XXNC : 写真解説チーム、情報分遣隊、
OBチーム、CIC分遣隊
IIMC : 無線情報小隊(その他不明)
陸軍師団 : CIC分遣隊、写真解説チーム、
情報分遣隊、写真任務隊等
海兵師団 : 不明

以上のように周到に編組されており、戦訓、予想作戦地の特性に応ずるよう速やかに部隊の新編、部隊区分の柔軟性等の米軍の特性が現われている。

(3) 情報活動の良否が作戦準備および戦斗に及ぼした影響

(a) 上陸後の初期作戦(4月上中旬)時期

嘉手納海岸上陸後、日本軍主陣地帯近迫時の情報収集は不十分であつたため、準備を周到に行うことなく不用意に日本軍の堅陣を攻撃して多大の損害を蒙つた。

この際においては、日本軍の主陣地帯の位置、陣地編成に関して不明であつたばかりでなく、攻撃部隊は

行動地域の地形さえも視察していなかつた。

その原因は、第1線各隊の近距離偵察の不十分によるが、上級指揮官が日本軍可能行動の判断とこれに基づく日本軍の戦力判断を誤つたため、適時その行動を統制して偵察、攻撃準備の余裕を与えなかつたことが大きな要因である。

米軍戦史ではこの件に関し防衛隊等の参加により日本軍の兵数が意外に大であつたことを強調しているが実際は洞窟陣地による日本軍の組織的防禦戦斗の能力を正しく評価できなかつたことが主な原因であつたと考えられる。

この結果として当初は、日本軍各部隊の戦力を低く見做つていたが、初期の戦斗により多大の損害を蒙つたため、じ後は反動的に過大に評価する傾向を生じた。

(b) XXNCの第1次総攻撃(4-19以降)時期

4-12までの苦い経験により、慎重な情報活動を行い、約1週間の攻撃準備を行つた。

この結果、日本軍防備の弱点、たとえば牧港低地からの奇襲攻撃を実施し、あるいは日本軍の洞窟陣地戦法の特徴欠陥を研究して、火焰と爆薬の戦法を実施した。

(c) 10Aの第2次総攻撃(5月中旬以降)時期

この期間における情報活動は甚だ不十分であつた。

これがため攻撃が徒らに慎重となり、機動の發揮よりも火力を重視し、僅少な日本兵の存在する限り攻撃を反復した。また、追撃の発動が遅延し、日本軍主力を逸する結果となつた。

その原因は天候不良による航空偵察の不十分、雨のため近距離偵察の実施困難、先入主による日本軍戦力の過大評価等によるもので情報見積りに反動心理が入っていたように思われる。

また、雨中錯雑地においても近距離偵察に遺憾をからしめるため、編制装備および訓練上再考を要する面があろう。

(b) 作戦末期

6月以降の追撃、八重瀬岳陣地の攻撃では概ね適切に実施された。

すなわち、素質、訓練度、団結力の低下した日本軍各部隊の戦力を概ね至当に判断した結果、大胆な機動力を発揮するようになった。しかし、この期間は天候が回復し、情報活動だけでなく、諸行動が容易となったことが与つて大きな要因となつている。

また、この期間はとくに心理戦資料の獲得に努力されたが、心理戦そのものは、日本軍の指導が適切であつたためあまり成果を挙げる事ができなかった。

(4) その他情報活動上参考となる事項

(a) 資料源

る獲文書による価値は大であつた。日本軍将校の屍体からは、命令、地図、地雷原配置図、等の貴重な資料が屢々獲得された。

戦闘間における捕虜は少く、かつ、重傷を負つているため、その供述による資料は少なかつた。

(b) 航空写真の限界

沖縄全島に対し、事前に写真偵察を行い、地図が作成されたが、高高度から撮影されたので、局部的状況を見るには不正確であつたり、雲による不明確な部分を生じた。

レイテ作戦を行つたクルーガー將軍は、上陸前に知りえた地形に関する知識には限度がある。事前に配布した地図上の距離の不正確は50%にも達した。部隊は上陸後、直ちに積極的に偵察を実施すべきである」と述べているが、本作戦においても同様であつた。

本部半島では、航空情報のみでは陣地の概略さえも判明せず、4-07-13の7日間の地上偵察を必要とした。それは、森林に富む山地であつたため、このような地形における航空写真情報の限界を示す1例と見ることができらる。

(a) 住民使用

情報収集のため、一部の住民が利用されたが、積極的な協力が得られなかつたため、大した効果を挙げる事ができなかった。住民を利用するには作戦開始前からの工作が必要である。

D 統合総合戦力発揮の程度と攻撃成果の関係

(1) 要旨

日本軍陣地が極めて堅固であり、かつ、地域が狭少で大きな陸上機動を許さなかつたため、米軍は、力により陣地を押し潰さねばならなかつた。

すなわち、絶大な戦力を連日、間断なく発揮して、個